語り継ぐ平和への思い

総務課総務法制係☎0824-73-1123

終戦を迎えてから、ことしで78年。長い年月が過ぎた現在も、かつて戦争で負った体や心の傷、あるいは家族を亡くした悔しさや悲しみを背負い続けている人たちがいます。

しかし、当時を知る人の高齢化が進み、それらの記憶が刻一刻と薄れていくことに、懸念が大きくなっています。

今回は、学生時代に特攻隊の飛行場の建設に携わった中谷憲登さんから、当時の様子や感じたことについて、記憶をたどりながらお話しいただきました。

皆さんも命の尊さ・平和の大切さについて考えてみましょう。

中谷（なかたに） 憲登（のりと） さん
昭和5年12月20日生まれ
92歳　高茂町

戦争に突入した学生時代

太平洋争が始まった昭和16年、中谷さんは山内小学校の6年生でした。

当時は、昼間は学校に通い、家に帰ると農業の手伝いをするという毎日を過ごしていました。

戦争が始まってからは、予科練（航空機の練習生）や志願兵の募集も多くなり、友人を含めかなりの人が志願したため、中谷さんと同世代の人は戦地へ行った人が多いそうです。

中谷さんは農業を勉強するため、昭和20年、県立双三（ふたみ）実業学校（現三次青陵高校）に進学しました。

そんな中、戦争はますます激化し、同年5月頃から、日本国内での地上戦に備え、特攻隊（生還を期さない体当たり攻撃部隊）の飛行場が日本各地に建設されるようになります。

飛行場の建設

全国で飛行場の建設が急がれる中、県内でも高田郡根野（ねの）村（現安芸高田市八千代町）に飛行場（海軍航空隊可部基地飛行場）を作るよう国から命令が下りました。庄原市や三次市周辺の学生・住民に動員が掛かり、当時15歳で夏休み中の中谷さんも、その一員として作業に従事することになりました。

毎朝、学校からトラックに乗せられ現場に向かい、夕方まで作業を行います。

現場では、トロッコのレールを設置・移設する作業や、山から削り出した泥をトロッコで運び降ろす作業をしていました。

中谷さんは、単純作業ばかりで、大したことができているとは思っていませんでしたが、それでも「国のために働く」という気持ちが強かったそうです。

当時は規律が厳しく、監督者の言うことに従わなければ、ひどい罰則が与えられたといいます。

反論したい気持ちはあっても、罰則を恐れて従わざるを得ません。また、勉強がしたいからと言って、させてもらえる時代ではなかったのです。

「成績が優秀かそうでないかに関係なく、誰もが一丸となって国に貢献しようという思いだった」と中谷さんは語ります。

【記事内に出てくる場所の位置（当時）】

原爆の投下

いつものように現場で作業をしていた8月6日の8時過ぎ、中谷さんたちは、南西方向の遠くの空でアメリカの爆撃機B29が飛行しているのを発見しました。

現場は山間部の開けた峠道にあったため、広島市上空がよく見えたそうです。B29が広島市上空を旋回した後、パラシュートで何かを投下したのが見えました。人間が降りているのだろうかと思っていると、突然激しい閃光が走りました。そして、しばらくたってから、地響きとともに強い衝撃が襲いました。

「30キロ以上離れていても強い光・音・衝撃を感じるほどの力だった。それが原爆だったのだと後から知った。まさにピカドンだった」と中谷さんは語ります。

現場は騒然とし、作業どころではなくなったため、汽車に乗って庄原に戻りました。

何もなくなった広島

原爆が投下された後、中谷さんたちは広島市の状況が気掛かりでした。原爆投下から数日後、下級生の友達に「広島に住んでいる姉の様子を見に行きたいから、付いてきてほしい」と誘われ、汽車に乗って広島市へ向かいました。

広島駅に到着すると、駅舎の屋根が吹き飛んで無くなっていることに気が付きました。駅舎を出ると、周りには何もなく、宇品まで見えるほどです。火が残っているのか、煙が上がっていました。

友達のお姉さんを訪ねると、トタンを拾ってきて小さな囲いと屋根を作り、その中で何とか生活している状況でした。

また、広島駅を出発する汽車には、衣服が焼け、裸で子どもを抱いている人もいました。

「原爆で焼けた町の中で、トタンを引っ張り出して雨風をしのいでいたくらいなので、誰もが過酷な暮らしをしていたのだろう。生き残った人たちも、原爆の後遺症に苦しんだと聞いている」と話します。

母校の山内小学校には、広島第一陸軍病院庄原分院山内分病棟が設置され、広島から原爆の負傷者が次々に運ばれていました。そこでは、毎日のように負傷者が亡くなり、学校の裏山で火葬されていました。中谷さんの父親も、薪を背負って火葬の手伝いに行っていたそうです。

自身の活動

中谷さんは、小学校からの依頼で、自身の戦時中の体験を子どもたちに話す機会がありました。

戦争の実相を知ろうとする、その時の子どもたちの真剣なまなざしが、今でも印象に残っているそうです。

また、山内老人クラブで発行している冊子（甲山（こうやま）の青雲）に自身の体験を寄稿するなど、戦争の記憶を後世につないでいく活動に取り組んでいます。

「若い世代に戦時中の話ができることはありがたい」と中谷さんは話します。

平和への思い

戦争や平和に対する思いについて、中谷さんは次のように話しました。

「現在のロシアとウクライナに限らず、争いは地球上どこにでもある。それぞれ強い思いがあり、さまざまな理由があると思うが、戦争では何の解決にもならない。人の命はもちろん、町並みや記録などいろんなものが失われてしまう。勝っても負けても何かの足しになるものではない。戦争ほどばかげたことはないと思っている。

戦争の話を聞く機会や、戦争の実相を書いた本はたくさんあるが、どう受け取るかは受け取った人次第で、考え方もさまざまだろう。しかし、戦争は悲惨な結末にしかならないということは、間違いのない事実だ。今を生きる私たちは、争うのではなく、助け合って生きていかなくてはならないと、強く認識するべきだと思う」

戦争を経験した多くの人が「78年経った今でも、当時のことを鮮明に覚えている」と話すほど、戦争・原爆の被害が、すさまじいものだったことが想像できます。しかし、これらの記憶を当事者から聞く機会は減り続けています。だからこそ、一人一人が戦争の悲惨さを認識し、平和の尊さについて考え、後世に伝えていくことが必要です。

市は、戦争や平和について考えるきっかけとして、「庄原市巡回平和パネル展」や「平和啓発セミナー」などを開催しています。当時の記憶や記録に触れることのできる機会ですので、ぜひご覧いただき、戦争・平和について考えてみてください。

ヒロシマ・ナガサキ原爆写真ポスター展

広島・長崎の原爆被害の実相や、核兵器の保有状況などを、写真で分かりやすく説明したポスターを展示します。

- **8月9日㈬まで**
  市役所本庁舎1階市民ホール
- **8月10日㈭～17日㈭**
  高野支所1階ロビー
- **8月18日㈮～25日㈮**
  比和支所1階ロビー

庄原市戦没者追悼式並びに平和祈念式典

本市の戦没者に哀悼の意を表し、恒久平和を祈念するため「庄原市戦没者追悼式並びに平和祈念式典」を開催します。

多くの皆さんのご参列をお願いします。（申し込みは不要です）

とき　8月23日㈬　10時～
（開場は9時～）

ところ
庄原市民会館　大ホール

その他
▼当日は要約筆記による案内があります。
▼各支所からの送迎バスを運行します。利用を希望する人は8月15日㈫までに各支所に申し込んでください。
（定員に限りがありますので、希望に添えない場合はご了承ください）

問い合わせ
社会福祉課社会福祉係
☎0824-73-1153
または各支所地域振興室および市民生活室